講道館柔道 十段物語

第14回
今牛若丸と称された　大澤 慶己

聞き手：宮崎　淳

大澤慶己十段は、身長167㎝、体重67㎏の小兵ながら、大型選手をものともせず倒す、まさに「柔よく剛を制す」鮮やかな足技の名手であった。往年の柔道ファンは「今牛若丸」と称した。

5階女子部道場の脇にある事務室で始まったインタビュー。時折、取材者の服をつかみ、崩しや捌きの説明をされるなど、物語は技術論にまで及んだ。

生い立ちについて

――生い立ちについて

大澤　大正15年3月6日に印旛郡宗像村で生まれました。妹が3人の4人兄弟です。家業は農業でしたが、父は村長を永くやり、農家の仕事はやりませんでした。奉公人が3人（男2人、女1人）居りまして毎日父が仕事の指図をしておりました。田圃の他に山林が何十町歩もありましたから忙しかったと思います。

千葉県立佐倉中学時代

――柔道をやる前は、何かほかのスポーツを経験されていましたか。

大澤　いや、田舎に育ちましたから、スポーツをやるような環境にはありませんでした。しかし、野山で遊んでいましたから、自然と足腰は鍛えられていたと思います。

――旧制佐倉中学（千葉県）で柔道を始められましたが、どのような理由で柔道を志すこととなったのですか。

大澤　私は身体が小さかったので、柔道をやるなんて考えてもいませんでしたが、武道の授業では柔道・剣道の中から柔道を選択しました。そして、幼いころから身体が小さく丈夫でなかったこともあり、父に「お前は柔道をやって心身ともに鍛えなさい」と言われまして、当時は父親

の言うことは絶対でしたから、入部しました。

――当時の佐倉中学での稽古はどのようなものでしたか。

大澤　特に、今の時代と変わった稽古はしていません。土谷新次先生（後に八段）という国士舘大学を卒業した先生がおられまして、部員は30人くらいでしたか、毎日2時間程のまとまった稽古をしたと思います。しかし、稽古以外でも鍛えられていましたから。

――稽古以外とはどのような……。

大澤　自宅から佐倉中学までは約2里（約8㎞）ありましたから、そこを毎日自転車で往復していました。途中に印旛沼がありまして、そこで自転車を船に乗せて渡り、臼井から汽車で佐倉まで行きました。毎日往復約3時間かかり、往復4里の自転車通学ですから、足腰は鍛えられました。今のように道路も、自転車も良くありませんから、それは大変な道のりでした。旧制中学5年間で、2度ほど印旛沼に落ちましたよ（笑）。

――印旛沼に落ちるとは……。

大澤　印旛沼を渡るときは船に自転車を乗せるのですが、途中で突風が吹いて、船が転覆することもありました。助けが来て何とか助かりましたが……まあ、水深も浅かったので命にかかわるような事故ではありませんでした。

――佐倉中学時代の試合で思い出に残る試合はありますか。

大澤　佐倉中学時代はあまりパッとしませんでしたね。身体も小さかったですし、柔道を始めて数年でしたから納得のいくような試合はありませんでした。

早稲田大学入学後

――佐倉中学を卒業後は早稲田大学に進学されましたが、どのような経緯で早稲田大学に進学をされたのですか。

大澤　早稲田大学には佐倉中学の先輩、鈴木吾郎さんがいまして、「早稲田に来い」と言われました。大学から引っ張られるほど強くありませんでしたから、受験をしました。そして、商学部に入学しました。

――当時の先生は

大澤　三船久蔵先生、徳三宝先生も師範の中に居られ、月に1回位お見えになられました。山本秀雄先生は恩師ではありませんが、回転する小内刈の名手で誰も真似ができない巧い柔道でした。

――早稲田大学での稽古はどのようなものでしたか。

大澤　大学では2時間程の稽古をしていましたが、その後、また講道館へ行って稽古をしていました。

――今でいう2部練のような稽古をしていたのですか。

大澤　それほど大げさなものではありませんが、それが普通でしたから。たまに、早稲田から講道館まで走って行くこともありました。

――大学での稽古、講道館での稽古。その間にランニングと、かなりの猛稽古をされていたのですね。

大澤　そんな大げさなことはないですよ。それが、普通でしたから。

学徒動員から帰って早稲田大学同期生と
（前列右端：大澤氏）

――早稲田大学在学中に、太平洋戦争がありましたが、先生は出征をされたのですか。

大澤　大学1年生の時（昭和20年）に佐倉連隊に入隊しまして、館山の防衛につきました。

――戦地には行かれなかったのですか。

大澤　もう、戦争末期でしたから、外に出て行くも何も、アメリカが攻めてきたときの防衛をやるのが精一杯だったのでしょう。入隊して2、3ヵ月で、館山で終戦を迎えました。

――そして早稲田大学を卒業された後は柔道とどのように関わっていかれたのですか。

大澤　当時は柔道をやっている場合ではなかったですね。とにかく、飯を食べなければならなかったので、卒業後（昭和24年）は玉塚証券に入社しました。会社に勤めてからも講道館で稽古をしていましたが、昭和27年に退社をして、当時の嘉納履正講道館長の勧めで講道館研修員の仕事を主にすることになりました。

講道館研修員時代

――講道館研修員（注1）とは、どのようなお仕事をされていたのですか。

大澤　研修生を指導する立場でした。

――研修生とはどういうものでしょうか。

大澤　当時、講道館には研修生として各大学を代表するような選手を集めて稽古、指導をしていました。松下三郎君（日本大学）、渡邊喜三郎君（中央大学）など各大学の俊英た

ちがいました。その日本を代表するような学生たちの面倒を、醍醐さんと共に見ていました。稽古、稽古の毎日でしたね。私もまだ試合に出ていましたから、各大学から来る学生たちが良い稽古相手になりましたし、学生も戦後の柔道界を代表する選手ばかりでしたから、素晴らしい稽古の場となったと思います。

――各大学を代表する選手たちを集めて醍醐先生とともに実施した稽古は、どのようなものでしたか。

大澤　毎週土曜日午後4時から講道館で形の稽古、乱取稽古と特段変わったことはしていませんが、柔道が好きな者たちが集まってやっていましたから、辛いとか苦しいとかはあまり思いませんでした。とにかく、柔道が出来るだけで幸せな時代でしたから――食うのに精一杯な時代に柔道に専念できて、幸せだったと思います。

大澤十段の考える技術論

――次に、技術論についてお聞かせ願いたいと思います。まず、先生は「防御を捨てて攻撃をした」と言われておりますが、「防御を捨てて攻撃をする」とはどのような方法をもって攻撃をされたのですか。

大澤　別に、難しいことをやったわけではありません。待っていれば大きな相手には引き付けられてやられてしまいますから、相手が攻めてくる前に攻撃をしました。多少、玉砕的だったかもしれません。何せ、身体が小さかった（選手当時で身長167㎝。体重67㎏）ものですから攻められる前に攻めるしかない。守ることを考えていたら小さな者はやられますから、先手を取ることばかり考えていました。ですから、稽古も強い相手としかやりませんでした。弱い者とは稽古をしませんでした。強い相手を探してお願いし、10分間くらいの稽古をしたら一息入れました。そして、一息入れている間に強い相手を見つけて、強い相手ばかり選んで稽古をしていました。そうするうちに、相手が強くても、大きくても対応できる力が自然に備わってきました。その稽古で守りから入ったら負けるということも学びました。

――次に、「相手に的を絞らせない」と言われていますが、小さな選手であった先生がどのようにして体を捌き、大きな相手にも組み負けなかったかをお教えください。

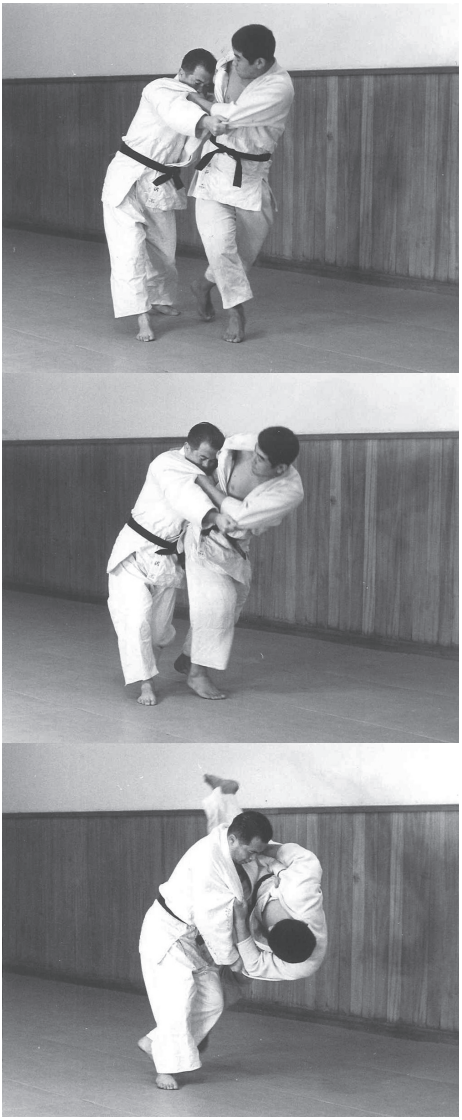
大澤　私は左組みでしたので、右組みの相手には、左手を相手の腋を持ちました。まともに組んだら小さな方が不利ですから、腋を抑えれば、相手より腕が短くても十分通用します。相手に引き付けられないためにも、相手との間合いを十分に取れるように力一杯抑えました。この突っ

張りと体の捌きで相手の力を分散させる、的を絞らせないようにしました。この体勢から「内股すかし」を得意としていまして、大きな相手が内股に来ても絶対に、股に足を入れさせませんでした。難しいことではありません。引き付けられて足を入れさせれば、小さな選手は投げられてしまいますから、その、相手の的、つまり、引き付ける動作と足を入れる動作をやらせなければそう簡単には投げられることはありません。相手の変化に対して素早く反応して捌くことが、的を絞らせないということです。

しかし、相四つの相手には苦労をしました。まともに相手の力を受けるものですから、相四つの相手には分が悪かったですね。

――次に、作りに関してですが、「小さな動きで相手のバランスを崩す」と言われていますが、具体的にはどのようなことを言うのですか。

大澤　相手の大きな動きに対して、こちらも大きな動きをすれば、こちらがバランスを崩してしまいます。動くことは大切なことですが、あまり無駄に動きすぎるのもこちらが不利になる場合があります。例えば、私の得意技の内股すかしは、相手に足を入れさせないようにして少し前に出ながら掛けるのですが、前に出るのは少しでいい。大きく出るとこちらもバランスを崩してしまいますから、体を捌き、



得意技の「内股すかし」

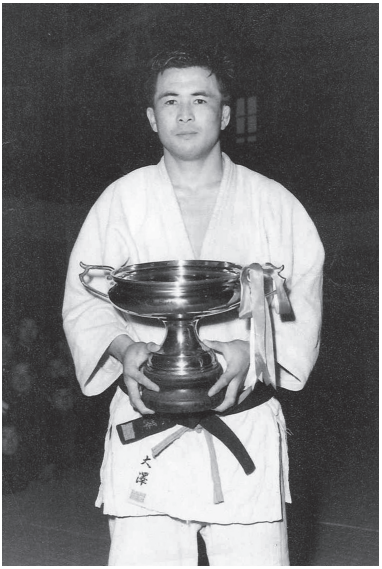
小さな動きで相手を攻める方が、小さな選手にとっては有利であり必要なことであると思います。今の階級別の試合ではなかなか理解が出来ない動作かもしれませんが、無差別の試合で小さな者が大きな者と闘うときは、小さく動くことは大切なことであると思います。

――試合戦術として、「相手が力を入れた時こそ力を抜く」と言われていますが、どのような方法のことを言うのかお教えください。

大澤　小さな者が大きな者と力比べをしてもかないません。小さな者が大きな者と闘うときは、力を入れたり、抜いたりと、緩急をつけながら捌くことが必要です。ずっと力を抜いていても駄目です。相手の強引な引き付けに対して、いくら身体が小さくても全力で突っ張る時も必要です。そして、その後に力を抜いて相手の力も抜かせるというか、分散させるというか――前に出たり、後ろに下がったり、力を入れたり抜いたりと、小さな者はこのような技術を駆使して相手に技を掛けさせない。そして、相手のバランスが崩れたところに掛けていくという方法が必要だと思います。

――小さな身体で先生は、どのような技を得意とされていましたか。

大澤　内股すかし、送足払、袖釣込腰をやりましたね。全て左の技で、右の技はほとんどやりませんでした。



全日本柔道選手権大会予選東京都大会で優勝
（昭和28年４月12日）

思い出の試合を上げるとすれば

――思い出に残る試合を上げるとすればどうでしょうか。

大澤　強い相手はたくさんいましたから、一人一人名前を上げることはしませんが、松本安市さん（注２）、吉松義彦さん（注３）、醍醐敏郎さんは本当に強かったです。その当時の試合ははっきり覚えております。そんな中で、私のような小さな選手が相手ですから、周囲は私とやるのがやり辛かったと言っていました。「大澤は、かけたらそこにいない」などと、よく言われました。

私の体重は67kgで小さいものですから大型選手からすると、やり辛か

ったと思いますよ。試合中ずっと足は動かしておりますから、技が入ってきたら「すかし」技を持っていましたからね。

醍醐さんは2回も全日本選手権で優勝しておりますけれども、どこに行っても俺は大澤に負けたんだと平気で言うんですよ。たまたま「内股すかし」で勝っただけですが。まあ大きな人と試合するときすかし技は武器になります、対戦する相手は嫌だったと思います。松本安市さんには個人的に大変可愛がられました。食事なんかにも誘われたりしましてね。

海外での柔道指導

――柔道普及のため海外指導へも数多く行かれておりますが。

大澤　北米、南米、ヨーロッパ、アジアと数回行きました。昭和27年には高垣信三八段を団長として吉松義彦七段と私で講道館派遣柔道使節としてブラジルに行きました。翌年ブラジル、アルゼンチン、ペルー、キューバ、メキシコの各地を回りました。そこでは必ずデモンストレーションを行うわけです。大体10人掛とか15人掛とかやりましたが、組んですぐ投げましたね。それもそれぞれなるべく違う技でね。観衆は喜びましたね。

講道館派遣柔道使節としてブラジルサンパウロ州へ
左端から吉松義彦七段、団長の高垣信三八段、大澤慶己五段、
ブラジル在住の方（昭和27年9月24日）

大澤慶己杯争奪少年柔道大会の開催

――成長期にある少年柔道の正しい普及発展を願い昭和56年11月に関東を中心に埼玉県新座市で第1回を開催されてから今年で32回目を迎えられるそうですが。

大澤　この大会は新座市に住んでいる渕辺吉博さん（注4）が中心になって企画された大会です。その当時、冠のついた大会がなかったものですから草分けかもしれません。少年柔道の発展に繋がれば大変嬉しく思います。

――この大会から多くの優秀な選手や指導者が育っています。鈴木桂治、小野卓志、鈴木若葉、羽賀龍之介などの名選手が輩出されています。

大澤　これからも発展することを願っております。

現在の柔道に対して思うこと

――現在の柔道に対して思うところはありますか。

大澤　今の大会の多くは体重別になり、「柔よく剛を制す」柔道が見られなくなりました。選手自身も、大きな相手には最初からかなわないと思っているようです。とても残念なことです。昔のように、無差別に戻すのは無理だとしても、せめて10kgや15kgの体重差があっても戦えるような柔道をしなくてはなりません。

今の選手はまともに相手の技を受けすぎますね。体捌きが出来れば、体重差や身長差があってもカバーできますから。

――最近では、60kg程度の選手が全日本選手権に出場することはありませんが……。

大澤　小さな選手にもどんどん全日本選手権に挑戦してほしいですね。最初から無理だなんて思わないで、どんどん全日本選手権に出てほしいです。身体が小さくても可能であると思うし、挑戦して欲しいです。大きな選手と戦って欲しいですね。

大きな相手と同じような柔道をすると、小さな選手は勝てません。相手の得意技を捌いて、まともに技を受けない。これを心掛ければ、小さな選手でも全日本選手権で闘えると思います。

――今の若い選手に伝えたいことはありますか。

大澤　柔道が上手くなるためには、稽古をしっかりとやることです。稽古、稽古、稽古です。しかし、稽古にもやり方があります。漫然とやらないこと、意欲、研究心を持ってやることです。他人の稽古を見ることにより、人の技を盗みながら、自分の技に置き換えていくことも大切です。

欲のある稽古とは、意欲と研究です。そして、柔道をこよなく愛し好きになる。そして、一生懸命に稽古をすれば、柔道は自然に覚えていきます……。

指導者としての心構え

――柔道指導者としての心構えについて。

大澤　俺は柔道をやっているから偉いというような考え方を持っては駄目です。講道館柔道を続けてやって来たがゆえに今日の自分があるということですからね。常に謙虚な姿勢が大事だと思います。

――教わる方は指導者の姿勢を敏感に受け取りますからね。

大澤　今は大会が多いでしょ、それぞれチャンピオンが生まれるわけです。指導者もメディアからちやほやされるもんですから有頂天になってしまいますね。戒めなければならな

全日本柔道形競技大会で審査員を務める大澤氏
（平成11年９月26日）

いと思います。

取材を終えて

健康の秘訣は、今でも毎日お酒を飲むこと。毎日、ワインを2杯は飲むそうで、それが健康の秘訣であると言われていた。質問に対して淡々と答えられる十段であったが、過去の稽古の話になると、謙遜の言葉が多かった。「普通にやっていた」とか「今と変わらない」などという表現で、自らを美化することを避けておられたが、若かりし日の稽古は想像を絶するものだと、周囲の先生方は口を揃えて言う。

敗戦後、柔道が出来るだけで幸せだったと言われる。このありがたさを現在に生きる若い柔道選手がどのように想像しても、出来るものではないだろう。

今回のインタビューを締めくくった言葉。「柔道を愛し好きになる」。この言葉を、今の若い選手たちへ向けて、今回のインタビューは終わった。

注１：柔道の普及につれて優良な指導員養成の必要から、昭和23年度に研修員、同27年度に研修生の制度が設けられる。

注２：松本安市（１９１８－１９９６）八段。福岡県出身、武道専門学校卒業。180cmを超える体格を活かし昭和15年全日本選士権五段の部、昭和23年全日本選手権大会で優勝等輝かしい戦績をあげる。天理大学や国際武道大学で指導にあたり、東京オリンピックの際は日本チームの監督を務めた。

注３：吉松義彦（１９２０－１９８８）九段。鹿児島県出身。武道専門学校卒業。戦後、鹿児島県警察に奉職。180cm近くの身長と100kgを超える体重で全日本選手権大会に３回優勝（昭和27・28・30年）。鹿児島県下で松下三郎（現九段）等、多くの人材を育成した。

注４：渕辺吉博（１９４４－　　）七段。全日本柔道連盟広報委員、同総務特別委員を歴任、埼玉県柔道接骨師会長を歴任、昭和49年より渕辺柔道接骨医院、昭和51年より渕辺道場を経営。

◇宮崎　淳　プロフィール

平成２年筑波大学体育専門学群卒業。
茗渓学園中学校高等学校教諭。
筑波ユナイテッド柔道コーチ。

◎大澤慶己十段略歴

年	できごと
1926年3月6日	千葉県印旛郡宗像村造谷に生まれる
1932年1月	宗像尋常高等小学校に入学
1938年4月	千葉県立佐倉中学校（旧制）に入学。柔道を始める
1941年11月8日	講道館入門
1941年11月15日	初段
1943年2月14日	講道館月次試合において15人抜きの快挙
1943年3月12日	二段
1943年4月	早稲田大学専門部商科に入学
1943年5月30日	第4回柔道早慶戦において、先鋒として出場（会場：講道館）
1944年2月	講道館月次試合において12人抜きの快挙
1944年9月14日	三段
1945年6月	陸軍歩兵第57連隊（佐倉連隊）に入隊
1945年8月15日	終戦
1946年3月	早稲田大学専門部商科卒業

1946年9月12日	四段
1947年11月16日	第1回稲門三田対抗柔道戦に出場。水谷英男と引分ける（会場：講道館）
1948年3月21日	第1回都下近県柔道選手権大会に出場。夏井昇吉・成毛秀臣らを破り四段の部優勝（会場：講道館）
1948年5月16日	講道館春季紅白試合に出場。醍醐敏郎四段に敗れる
1948年5月24日	五段
1948年10月3日	関東一都六県柔道優勝試合に千葉県副将として出場。決勝戦で醍醐四段を破る（会場：講道館）
1948年10月31日	全関東対全九州対校試合に出場。石橋五段を開始わずか30秒にして送足払で破る（会場：福岡県多賀神社相撲場）
1948年11月1日	十地区対抗大会に関東大将として出場。準決勝で松本安市六段を破る（会場：福岡県多賀神社相撲場）
1948年11月21日	第2回三田稲門対抗柔道戦に出場。小坂肇五段を破る（会場：講道館）
1949年	玉塚証券入社（1952年まで）
1949年3月21日	第2回都下近県柔道選手権大会に出場
1949年5月5日	第2回全日本柔道選手権大会に出場。島谷一美六段に勝利するも、木村政彦七段に敗北（会場：蔵前国技館）

1949年10月2日	東京都柔道選手権大会に出場、決勝で醍醐六段に敗れ準優勝（会場：芝スポーツセンター）
1949年10月29日	全日本東西対抗柔道大会に出場。優秀選手となる（会場：大阪仮設国技館）
1949年11月3日	第4回国民体育大会柔道大会に千葉県代表として出場（会場：講道館）
1949年11月27日	第3回稲門三田対抗柔道戦に出場（会場：講道館）
1950年3月21日	第3回全関東近県柔道選手権大会において優勝（会場：講道館）
1950年5月5日	全日本柔道選手権大会に出場。松本安市六段に敗れる（会場：芝スポーツセンター）
1951年	講道館研修員となる
1951年3月21日	第4回関東近県段別優勝試合に出場。五段の部3連覇を果す（会場：講道館）
1951年9月23日	第2回全日本東西対抗柔道大会に出場。敢闘賞を授与される（会場：名古屋市金山体育館）
1952年5月18日	全日本柔道選手権大会に出場（会場：両国メモリアルホール）
1952年6月28・29日	日本三大地区対抗柔道大会に出場（会場：両国メモリアルホール）
1952年8月17日	第3回全日本東西対抗柔道大会に出場。技能賞を授与される（会場：秋田市八橋球場）
1952年9月24日	ブラジルサンパウロ州政府体育局長の招聘により、講道館派遣柔道使節として高垣信三八段・吉松義彦七段と共に出国

1952年10月4・5日	全ブラジル柔道大会（講道館使節歓迎大会）において、各種形・15人掛を披露（会場：パカエンブウ屋内体育場）
1953年1月6日	ブラジル・アルゼンチン・ペルー・キューバ・メキシコを歴訪し帰国
1953年1月30日	六段
1953年4月12日	第4回東京都柔道選手権大会に出場し、優勝（会場：講道館）
1953年9月27日	第4回全日本東西対抗柔道大会に出場（会場：福岡市平和台野球場特設会場）
1953年	早稲田大学柔道部師範となる（1996年まで）
1954年1月10日	講道館特別指導員となる（1956年まで）
1954年4月29日	全日本柔道選手権大会に出場（会場：両国国技館）
1955年1月10日	講道館研修生補導となる（1963年まで）
1956年1月13日	講道館指導員となる（1980年まで）
1957年9月30日	第8回全日本東西対抗柔道大会に出場（会場：福岡スポーツセンター）
1961年5月2日	七段
1963年7月	フィリピン柔道連盟の招聘により、1ヵ月の柔道指導に赴く

1966年1月9日	審議会審議員となる（現行）
1971年1月10日	講道館外人臨時試験委員となる
1971年5月1日	八段
1974年4月1日	早稲田大学教授となる（1996年まで）
1975年	日本柔道育英学会 講道学舎（副学頭となる。（2007年まで。以降学頭）
1976年7月26日～31日	オリンピックモントリオール大会柔道競技において、審判員を務める
1979年1月14日	講道館国際部指導員となる（1989年まで）
1980年11月29・30日	第1回世界女子柔道選手権大会において選手団団長を務める（第5回より男女同時開催となり、副団長を務める）
1980年4月	全日本柔道連盟幹事となる（1983年まで）
1981年9月3日～6日	第12回世界柔道選手権大会において審判員を務める
1982年	早稲田大学柔道部部長となる（1995年まで）
1983年1月9日	道場指導本部副本部長となる。また、女子部指導員となる（1984年より主事。現行）
1983年4月	全日本柔道連盟理事となる（1989年まで）
1983年	全日本柔道連盟審判委員会委員（1992年まで）

1985年4月1日	国際試合選手強化委員会女子部強化担当部長（1989年まで）
1986年	国際試合選手強化委員会副委員長（1989年まで）
1990年4月	財団法人全日本柔道連盟評議員となる（2012年まで）
1991年1月13日	講道館技研究部部員となる（2007年まで）。2008年より2011年まで顧問
1992年4月1日	財団法人講道館評議員となる（2012年まで）
1992年4月28日	九段
1996年	早稲田大学名誉教授となる（現行）
2006年1月8日	十段
2008年1月13日	道場参与となる（2011年まで）
2009年4月1日	講道館非常勤参与となる（2012年まで）
2012年4月1日	公益財団法人講道館評議員となる
2012年4月1日	公益財団法人全日本柔道連盟顧問となる

※参考文献：第4回国民体育大会柔道競技プログラム（昭和24年）
雑誌『柔道』
小野沢弘史・志々田文明著「大澤慶巳と柔道論」『早稲田大学体育学研究紀要』第28号（平成2年）